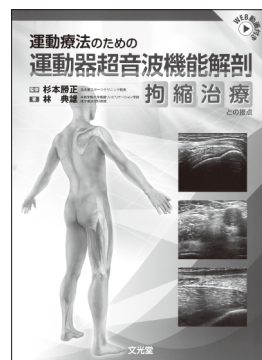


杉本勝正(監修)
林 典雄(著)

運動療法のための運動器超音波機能解剖 拘縮治療との接点

評者 小柳磨毅
(大阪電気通信大学医療福祉工学部)



運動器に対する超音波画像診断装置の解像度が著しく進歩し、臨床での使用が普及しつつある今日、そのトップランナーである著者による時宜を得た価値ある書籍が出版された。

本書は「関節拘縮を超音波で見るとは」との総論に始まり、上肢と下肢の関節における組織の超音波観察と拘縮との関連、さらに近年注目が高まっているエラストグラフィーを用いた組織弾性の計測を示した章により構成されている。

総論では超音波により描出された運動器の組織が、描出のコツとともに精密な画像により詳細に示されている。著者は関節拘縮の病態を、伸びるべき組織が伸びない「伸張障害」と、運動に伴う組織間の滑りが癒着してしまう「滑走障害」とでほぼ説明が可能であるとしている。志を同じくする仲間と長年にわたって拘縮の病態を追求してきた結果、到達した結論である。

次章で詳細に示されているとおり、超音波画像の進歩はセラピストが治療対象とする組織の直視を可能にし、その結果、関節拘縮を可視化できる可能性が出てきた。加えて運動に伴う組織の動態もリアルタイムに観察でき、使い方によって可動域制限の原因を同定できる根拠が示されている。今後、理学療法における評価の主体はROM-testなどの量的評価から、原因追及と治療効果の判定を同時に行えるこれらの質的評価へ

大きく転換すると考えられる。さらに特筆すべきはこれらの病態観察と運動学的分析にとどまらず、組織ごとに「超音波解剖・機能解剖所見を踏まえた運動療法技術」の項が設けられ、病態に対応したオリジナリティーの高い治療手技が紹介されている点である。関節モビライゼーションの治療は、病態の観察によって手技が普遍化し、効果検証も可能となっている。特にこれまで科学的な根拠に乏しかった軟部組織に対するモビライゼーションの治療手技にとって、本書で示された超音波画像による数々の動態評価が、治療体系を確立するための極めて大きな進歩であることは疑いない。これに加えて本書は実際の動態評価や治療手技を示した多くの動画が、ウェブサイトの利用によってスマートフォンやタブレットで簡単かつ鮮明に読者に提供され、その価値を揺るぎないものになっている。

理学療法の起源は紀元前からとされるが、われわれの先人はいずれも皮下組織の動態を直視できる機器とその活用を渴望してきたと思われる。理学療法士にとって強力な weapon(武器)を手に入れるための比類のない優れた指南書である。

● B5判, 200頁, 4色刷
定価: 5,500円+税
文光堂刊, 2015年